

タガログ語母語話者による引用表現の習得

—自然習得の場合—

杉浦まそみ子

要 旨

教室教授を全く受けずに社会的交流の中で日本語を習得したタガログ語母語話者女性 5 名とのインタビューに表出された「と言う」「と思う」に焦点をあて、分析を行った。その結果、まず①他者発話の引用は「だって・んだって」、②自己発話の引用は「私+言う+φ」、③思考の引用は「と思う」のように 3 種類の引用にそれぞれ異なった形式が使用され、その後汎用の引用標識「って」の習得によって、上記の形式に加えて「って」でも表示することが可能になり、引用表示がより明確になると推測された。「だって」はひとかたまりの標識として他者発話の引用に限定され、「と思う」は定型表現として習得されると推測された。引用知識が十分でない学習者では、異なる文体を利用した発話者の表示や学習者固有の形式の使用など不足を補う方略が見られた。引用動詞と引用句との位置関係は、引用形式に関する知識の増加と共に動詞が引用句の後ろに来る傾向が見られた。

【キーワード】 と、 って、 引用、 第二言語の自然習得、 タガログ語母語話者

1. はじめに

我が国の長期滞在外国人は現在約 90 万人に上るが、そのほとんどが教室での日本語教育を全く受けないまま日本語を習得している⁽¹⁾。このように社会生活での交流を通して習得された第二言語としての日本語はこれまで研究されておらず、その実態はほとんど知られていない。こういった状況の中、教室外、教室内の学習の可能性を生かし限界を補完しあう統合的シラバスの構築を目指し、第二言語としての日本語の自然習得の実態を解明する研究が進められている⁽²⁾。この研究の一環として、本稿では、自然習得された日本語の文法習得の側面から引用表現について記述を試みたい。

引用は時間的、空間的に異なる場での発話を進行中の会話の場に取り入れるという二重構造を持っているため、その形式の習得は容易とは言えない。例えば、ある程度の日本語能力を習得した者でも「聞いた、どこで CD が買えますか」と言ってしまうような

混乱はよく見られる。また、教室では引用表現として「～と言う」という形式に重点をおくため、学習者が「・・・と言いました」というパターンを繰り返し、聞き手に冗長さや違和感を与えることもしばしばである。本稿では、「と言う」「と思う」のように引用助詞と引用動詞を使用する引用表現に焦点をあて、第二言語としての日本語の自然習得の実態の記述を試みる。

2. 先行研究

2.1. L2 としての日本語の教室内習得

Kamada (1990) ではアメリカにおける日本語 (JFL) 学習者を対象に研究し、引用動詞及び助詞「と」の不使用と文体選択の困難を指摘している。引用動詞及び助詞の不使用については、上級学習者にも見られることから、言語知識の不足や単なる不注意の他に情報伝達に関する談話レベルでの母語の転移の可能性を論じている。また、文体選択については、元の発話を臨場感豊かに引用しようとする直接引用で不適切な文体が使用されること (例: 私の友達は「??汚い言葉を教えてください」と言って) や、能力レベルの低い教室内学習者では直接引用回避の方略が使用されることを示し、その要因として誤った文体選択のリスクをあらかじめ避けようとする傾向や間接引用に偏った教科書の影響をあげ、教室内学習者の文体選択の難しさを指摘している。一方、教室外での学習 (日本での生活) を経験した学習者では直接引用と間接引用がバランスよく使用されている。さらに、鎌田 (2000) では落語の一人芝居のような引用句だけの引用表現を報告している。引用の助詞については、この2つの論文に見る限り、全く使用されないか「と」を使用する例は紹介されているが、「って」や「だって」の使用例は見られない。

2.2. L1 としての日本語の自然習得

幼児の自然習得研究には岩淵・村石 (1968)、大久保 (1967)、Clancy (1985) の縦断的研究があり、引用の助詞では共通して終助詞の「って」が最も早く習得される。岩淵・村石 (前出) では続いて「と」が、大久保 (前出) では引用動詞以外の動詞「行く」を伴う「～って行く」、終助詞「だって」、「と」 (例: 「～という」「ジャブんと」) の順で表出されている。

2.3. 統語的研究等

引用の「と・って・だって・んだって」の特性について、「って」での終結 (堀口 1995)、「て」の用法 (山崎 1996) などの研究がある。堀口は「だって、んだって」を含む「って」での終結を分析し、引用される発話が進行中の会話のものか否か、伝達者の発話か

否かなどによって構造が異なるとしている。山崎は、「って」が単に「と」より文体的に
くだけているだけではなく、終助詞的性格などを持つほか、「お金を引き出そうと銀行へ
行った」のような意図引用の用法や動作と同時にされる発話の引用の「と」は「って」
での置き換えが不自然であるとしている。伝聞⁹⁾の「って」には「だ+終助詞+て」の
ように終助詞の介在を許す単独の使用と「(ん)だって」のように複合辞的なものがあり、
この複合辞の類似形には意外・驚きを表す「(ん) だって」と情報源の発話をそのまま提
示する「だって」(例：明日、音楽会があるだって) があるとしている。つまり、引用形
式は、引用される句の元々の発話の場や発話者の立場や引用句が実際発話されたものか
否かによって引用形式が異なる場合もあるわけである。

L2としての日本語における引用表現の習得研究は、2.1.で示したように、教室内学習
者については多くはないが行われており、引用形式の使用や文体選択に困難があること
が明らかになっている。しかし、自然習得者についてはほとんど未解明であり、本稿で
こうした学習者の引用表現の実態を記述することは有意義であると考えられる。

3. 研究目的

教室内学習者では、不十分な言語知識からであれ情報伝達に関する談話レベルの母語
の転移によるものであれ、引用であることを表示する「助詞+引用動詞」という形式自
体が全く表出されない場合があること、また表出がある場合には「と言う」が使用され
ること、そして幼児の母語習得では「って」が最も早く習得されることが先行研究で
示された。さらに、統語的研究から、引用句が元々伝達者の発話なのか否かによって引用
形式が異なる場合があることが示された。これらをふまえ、自然習得された日本語にお
ける引用形式がいかなるものかを見るために、次の3つの項目を研究目的とする。

- (1) 引用の際にどのような形式が使用されているか。
- (2) 伝達者自身の発話と他の話者の発話の引用には形式に違いがあるか。また、言語
化された発話と言語化されていない思考の引用とでは違いがあるか。
- (3) 引用形式の知識が十分でない場合、どう補われているか。

用語については、「太郎が、あした晴れるだろうと言った」という花子の伝達の場合、
『あした晴れるだろう』を<引用句>、「と言った」のように引用を示す形式を<引用形
式>、「と」を<引用標識>、「言った」のように引用を示す動詞を<引用動詞>と呼ぶ。
引用句の発話者である「太郎」は<元発話者>、花子を<伝達者>と呼ぶ。「～という名
詞」の形式は扱わない。

4. 方法

4.1 データ収集⁽⁴⁾

データは、国際養子縁組を申請している学習者に対し、ソーシャルワーカーが養親家庭における適応状況の調査を目的に行った約30分～60分（表1.）のインタビューのテープとその文字化資料である。面接は学習者とその家庭について正確な報告を作成するという公的性格をもつため、誤解が生じないように聞き直しや確認が頻繁に行われている。その結果、引用された発話の発話者の同定はかなり容易となっている。

4.2 学習者

タガログ語を母語とする女性5名で、いずれも日本語教室などで教授を受けた経験はない。5名は日本人配偶者及び子どもと日本に居住し、家庭や仕事などでは主に日本語を使用しており、日本語との接触は非常に広範囲である。データ収集時の年齢及び通算滞日年数は表1.の通りである。初来日以来継続的に日本に居住していたわけではなく、1年あまり帰国を余儀なくされた者もある。その離日期間は通算滞日年数には含まれていない。

表1. 被調査者の年齢・通算滞日年数と面接録音時間

学習者	年齢	通算滞日年数（年）	面接録音時間（分）
M	32	4	36
S	42	7	38
R	28	7	57
E	40	8	44
L	38	13	28

5. 分析の方法

インタビューの文字化資料から発話や思考などの引用表現をとり出した。これらは必ずしもすべてに引用標識・引用動詞が整っているわけではなく、ポーズ、音調、前後の文脈などから引用と考えられるものもある。

学習者が引用表現に関する言語形式をどの程度習得しているかを判定するために、基準形式として発話引用の「典型的引用表現」を設定した。日本語では「来ると（って）言いました」のように、<引用句+と（って）+引用動詞>という形式が規範的である。しかし、会話では「言いましたよ、来るって」のように引用動詞が引用句の前に来る形式<引用動詞+引用句+と（って）>も普通に使用されており、規範に沿っていると言

える。そこで、この2つの引用形式を「典型的引用表現」とし、表出数を調べた。

元発話者が伝達者自身かそうでないか、あるいは引用句が元々発話か思考かは引用形式とかかわってくる。そこで、取り出したすべての引用表現を①伝達者以外の者が他の会話で行った発話（以下「他者発話」と言う）が引用されたもの、②伝達者自身が他の会話で行った発話（以下「自己発話」と言う）が引用されたもの、③伝達者の思考（以下「思考」と言う）が引用されたものの3種に分類し、それぞれで使用された引用形式と表出数を見た。その際、「って」と「だって・んだって」の区別については、例えば、「だめだよって」のように「だ」と引用標識「って」の間に終助詞が介在する形式は「って」の使用とし（山崎 1996）、「だめだって」のように介在しないものは「だって」の使用とした。引用動詞がない場合の他者思考の引用については、発話か思考かの厳密な判定は困難であるため、前後の文脈から発話の引用と判定されるものを発話の引用とし、他者思考は研究対象としなかった。標識がない引用（ ϕ で表示）の表出数については、話し言葉では引用句の切れ目が明確でないことや、伝聞の「そうだ」が連文や全体をもその作用対象とする（仁田 2000）ことなどから、引用標識を全く伴わずに引用句が連続している場合は、文が複数であっても1とカウントした。又、「言う」「思う」などの動詞と引用句の位置関係について、引用句の前にある（以降「動詞先行」と言う）か後ろにある（以降「動詞後続」と言う）かを観察した。

なお、取り出した表現が引用かどうか、あるいは引用句が他者発話か自己発話かあるいは思考かの判定は日本語母語話者の大学院生1名（日本語教育を専門としない）と共に行い、判定が一致したものを分析対象とした。

6. 分析結果

発話の引用における典型的引用表現の表出（30分当たり）が少ない順に被調査者を1～5とし、表2.に表した。

表2. 典型的引用表現の表出総数と30分当たりの表出量 V：発話の引用動詞

	学習者	V+引用句+と(って)	引用句+と(って)+V	計	表出数/30分
1	S	—	—	—	—
2	E	—	—	—	—
3	R	1	1	2	1.1
4	M	—	3	3	2.5
5	L	5	15	20	21.5

表 2.に見られるように、S と E では典型的引用表現は全く使用されていないのに対し、R, M, L では典型的表現が使用されている。この結果から、典型的引用形式の習得の有無によって {S・E} と {R・M・L} という 2つのグループに分けることができる。以降、この 2つのグループに着目して結果を見ていく。

6.1 発話の引用

6.1.1 他者発話の引用

他者発話の引用形式の表出数と表出割合を表 3.に示した。

表 3. 他者発話の引用形式の表出数と表出割合

V : 引用動詞

	φ	だって	んだって	って	と	V 先行	V 後続
S	4 (44)	4 (44)	—	1 (12)	—	—	—
E	10 (36)	16 (57)	2 (7)	—	—	4 (80)	1 (20)
R	8 (44)	1 (6)	5 (28)	4 (22)	—	6 (67)	3 (33)
M	1 (7)	—	—	13 (93)	—	1 (33)	2 (67)
L	3 (9)	4 (12)	5 (15)	21 (61)	1 (3)	8 (36)	14 (64)

引用形式: (%) は学習者毎の引用標識表出総数(φを含む)に対する各項目の割合を示す。

V 先行・V 後続: (%) は学習者毎の引用動詞表出総数に対する各項目の割合を示す。

他者発話の引用では標識なし「φ」と「だって・んだって・って・と」の 4種類の標識が見られる(表 3.)。(< > 内: 推定される意味⁽⁵⁾)

- (1) おとこ、ビール買ってきて <彼が「ビールを買ってきて」と言った -E>
- (2) ごめんなさいだけでも、彼だて <彼が「ごめん」とだけ言って -S>
- (3) すぐ先生に言ったんだって <「すぐ先生に言った」と言った-R>
- (4) だんなさんは、だいじょうぶだって <だんなさんは「大丈夫だ」と言った-E>
- (5) わがままとゆっとる <「わがままだ」と言っている -L>
- (6) なんで結婚しないのって言われた <「なんで結婚しないの」と言われた -L>

「φ」(例 1) は全員に見られ、その表出割合は S, E, R では高いが、M, L では極めて低い。「φ」ではしばしば元発話者が明示された(例 1)。典型的引用表現を習得していない S, E で使用される主な標識は「だって」(例 4)と「んだっ」(例 3)である⁽⁶⁾。S は引用句から離れた位置にも「だて(だって)」を付加し、他者発話であることを明示している(例 2)。一方、R, M, L では「って」(例 6)の使用割合が増加し、特に M と L では「って」が非常に優勢となっている。「と」(例 5) は 1例のみである。

つまり、他者発話の引用表現では、主要な標識は「だって」「んだって」が先に習得され、続いて「って」の習得が進み同時に「 ϕ 」が減少すると推測される。引用動詞はSでは表出がない。そして、動詞の位置は、E, Rでは先行型引用動詞の割合が高いのに対し、M, Lでは後続型が増加している。

ここで他者発話の引用の「だって・んだって」と引用句との接続を詳しく見てみる。

表4. 「だって」「んだって」の接続

学習者	だって			んだって		
	名詞・ナ形容詞	イ形容詞	動詞	ナ形容詞	イ形容詞	動詞
S	○	—	○	—	—	—
E	○	○	○	—	—	○
R	○	—	—	—	—	○
M	—	—	—	—	—	—
L	○	—	—	○	○	○

表4.からわかるように、「だって」は、S, Eでは名詞・ナ形容詞(例:大丈夫だって -E)、イ形容詞(例:おいしいだって -E)、動詞(例:用事あるだって -S)とすべての品詞への接続が見られる。一方、R, M, Lでは名詞につくものだけである。「んだって」は、Sでは使用がない。E, Rでは動詞につくもの(例:行ったんだって -R)だけであるのに対し、Lでは、イ形容詞(速いんだって -L)やナ形容詞(きれいんだって -L)が見られる。つまり、典型的引用表現を持たないS, Eでは「だって」が名詞・ナ形容詞・イ形容詞・動詞に直接つく形式で表出される傾向があるのに対し、典型的引用表現を持つR, Lでは名詞には「だって」、動詞とイ形容詞には「んだって」、ナ形容詞には「だって・んだって」と、直前の語との接続が文法的になる傾向があることがわかる。

6.1.2 自己発話の引用

自己発話の引用形式を表5.に示した。

表5. 自己発話の引用形式の表出数と表出割合

	ϕ	だって・ んだって	って	と	V先行	V後続
S	6 (100)	—	—	—	2 (100)	—
E	7 (100)	—	—	—	2 (100)	—
R	7 (78)	—	2 (22)	—	3 (75)	1 (25)
M	—	—	10 (100)	—	1 (25)	3 (75)
L	4 (29)	—	10 (71)	—	5 (38)	8 (62)

(7) 私ゆった、もうわたし結婚してるよ (私は「もう結婚している」と言った-E)
 (8) 今度そんなことしないでって 「今度はそんなことしないで」と言った-R)
 「 ϕ 」(例7)はMを除く全員で見られる。「って」(例8)はR, M, Lで見られ、特にM, Lでは非常に優勢となり「 ϕ 」は減少している。「 ϕ 」では「私」や「言う」による自己発話の表示が頻繁に見られた。

「だって・んだって」は自己発話の引用には全く使用されていない。<だめだ>を含む自己発話の引用を見ると、「だめって -R」「だめだよって -M・L」のように「だ」がないか必ず終助詞が「だ」と「って」の間に介在しており、「だめだって」のように「だ」と「って」が直接つながった形式は1例もない。

つまり、自己発話の引用形式は「私・言う・ ϕ 」から「って」への移行が見られ、「だって」「んだって」は使用されない。又、引用動詞の位置は、S, Eでは先行型だけなのに対し、R, M, Lでは先行型と後続型、特にM, Lでは後続型が優勢になっており、他者発話の引用動詞と類似した傾向が見られた。

6.1.3 対話の引用

他者発話と自己発話とから成る対話の引用では、例(9)のように、元の会話場面を活写する一人二役の落語調(鎌田2000)にあたるものが見られた。伝達者は典型的引用表現を持たないSであるが、タガログ語で行われた実母とS自身の会話をそれぞれ異なる文体(実母の発話;普通体, S自身の発話;丁寧体)で表現し、元発話者を明らかにしている。Sは引用の言語知識は十分ではないが、親子という社会的関係を日本語の待遇表現を用いた文体で示している。

(9) こんどまたやるね一、うーん、やらないです。やるね? はい

(他者発話:自己発話)<「次もまたやるのね」と母が言ったので、「ううん、やらない」と私は言った。母が「やるのね」と言ったから、私は「うん、やる」と言った -S>

6.2 思考の引用

表6. 思考の引用形式の表出数と表出割合

	ϕ	だ	っ	と	V*先行	V*後続	と思う
S	5 (100)	—	—	—	—	—	—
E	4 (80)	—	—	1 (20)	1 (50)	—	1 (50)
R	1 (17)	—	1 (17)	4 (66)	1 (20)	—	4 (80)
M	2 (12)	—	10 (59)	5 (29)	—	3 (33)	6* (67)
L	1 (50)	—	1 (50)	—	2 (100)	—	—

V* : 「思う」以外の動詞 6* : うち1例は「って思う」

表 6.からわかるように、思考の引用では「 ϕ 」(例 10, 例 13) が全員に見られる。引用標識は、E では「と」(例 11) のみ、R, M では「と」と「って」(例 12)、L では「って」が見られる。S は標識や動詞を用いる思考引用の形式を全く持っておらず、終助詞「かな」(例 10) や「な」で表現している。「と」はすべて「思う」と共に使用される後続型で、典型的引用表現を持たない E にも使用されている。一方、「って」は終助詞的に使用されるか、あるいは「思う」以外の動詞と使用され、その場合、動詞は先行型、後続型のどちらも見られる。

- (10) あたしは (略) Mちゃんカトリックかな—
 〈「Mちゃんもカトリックにしたい」と思う -S〉
- (11) もうだめかなと思った—
 〈「もうだめかな」と思った -E〉
- (12) 心配でどこいちゃったかなあって 〈「どこへ行ってしまったか」と心配で -R〉
- (13) いつも考えてるの、子どもがね、学校入りたいの、一番学校
 〈「子どもを一番いい学校に入りたい」といつも考えている -L〉

また、S では推測・推定のモダリティ的表現の「と思う」の代わりに終助詞「かな」と進行中の会話の聞き手への待遇表現の「です」を合わせた「かなです」という固有の形式が頻繁に見られた (例 14)。

- (14) ごじゅあるかなです—
 〈「五十歳ぐらいだ」と思う -S〉

つまり、思考の引用では、典型的引用表現を持たない段階でも「と」と「思う」とが結合した「と思う」がひとかたまりで使用される。一方、「って」は典型的引用表現の習得した学習者だけで、この場合「って」で終わるか「思う」以外の動詞と共に表出され、この場合、動詞は先行型か後続型か決まっていない。また、思考引用の標識も動詞も使用できない学習者では「かなです」という固有の引用形式が見られる。

7. 結果のまとめ

他者発話の引用標識は「だって・んだって・って・と」と多様であるが、能力レベルにかかわらず使用される標識は「だって・んだって」である。典型的引用表現が習得されたレベルでは、「だって・んだって」は引き続き使用されるものの、「って」が優勢となる傾向が見られる。「と」は、使用は見られるものの、主な発話引用標識ではない。また、「だって・んだって」では、引用に関する知識の増加と共に先行する語とのつながり方が文法的に精緻化する傾向が見られる。

自己発話の引用標識は「って」のみで、「だって・んだって」と「と」は全く使用され

ない。典型的表現を持たない学習者では標識自体が全く使用されず、「私＋言う」で表示される。そして、発話の引用動詞は引用知識の増加と共に先行型から後続型へ移行する傾向が見られる。

思考の引用では「と思う」がひとかたまりで習得され、発話の引用についての知識が十分でない学習者においても使用される。また、典型的表現を習得した段階では、「って」が「心配（する）」のような思考を表す動詞と共に表出される。

引用についての言語知識が極めて不十分な学習者 S では、母語で行われた親子の対話を引用するのに、日本語の待遇表現の巧みな使い分け（他者発話＝普通体、自己発話＝丁寧体）による元発話者の表示や、推定・推測のモダリティ的表現の「と思う」の代わりに終助詞と聞き手への待遇表現を合わせた固有の形式「かなです」の創出が見られ、統語知識の不足を補う方略の使用が観察された。

8. 考察

上の結果から引用形式の習得についての仮説を次のように表すことができる(図 1.)。

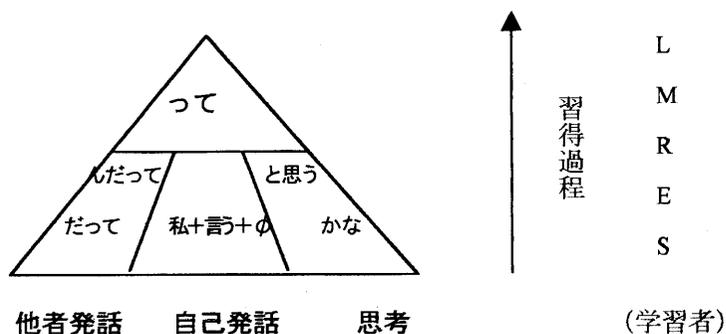


図 1. 引用形式の習得仮説

引用形式の習得は、①他者発話の引用は元発話者明示、又は「だって・んだって」②自己発話の引用は「わたし＋言う＋の」③思考の引用は終助詞「かな・な」又は「と思う」（定型的表現）のように3種類の引用にそれぞれ異なった形式が習得され、その後、すべての引用に使用可能な引用標識「って」の習得によって3種類の引用が「って」でも表示することが可能になり、引用表示が明確になっていくと推測される。しかし、この仮説はタガログ語母語話者5名という極めて限定された学習者のデータの分析結果から得たものであり、即一般化できるというものではない。そして、本データに見る限り

では、引用標識の「と」を含む「と言う」が使用される教室内習得者（Kamada, 鎌田）とも、「って」が最も早く習得される幼児のL1の習得（岩淵・村石, 大久保, Clancy）とも異なっていると思われる。

本データの自然習得者において「だって・んだって」の習得が早い理由として、他者発話引用の頻度の高さと地の部分との境界の明確化の必要性が考えられる。どのような接続であろうがとにかく最後に「だって」を付加している（例1）や「用事あるだって -S」などからも、他者発話の引用表示がコミュニケーション上重要な要素であることを学習者が認識していることがうかがわれる。単独としてあるいは複合体として母語話者に使用されている「だって・んだって」（山崎）が学習者自身によって社会的リソースからまず他者発話専用の標識として取り込まれると推測される。また、「だって」はひとかたまりで他者発話専用の引用標識ととらえられているため、自己発話の引用で結果的に〈だって〉の語形が生じる〈名詞文だ+って〉が回避されると推測される。つまり、本データで見える限り、《名詞文だって》は独自の中間言語として学習者の引用表現体系に組み込まれており、これは自然習得の限界の一つであろう。

一方、自己発話の引用は伝達者自身の発話の引用であるため、地の部分からの切り離しは他者発話ほど厳しく行う必要はない。そのため、汎用性のある「って」が習得されるまでは「私」や「言う」のような表示形式で十分であり、引用形式の習得が遅れると推測される。

思考の引用では「と思う」がかなり早く習得される。「と思う」は後続型を全く持たない学習者でも表出されていることから、ひとかたまりの定型表現として習得されると推測される。また、多用が見られる「なあって」など適切な終助詞の使用は社会的交流の中での言語習得の特徴といえよう。

学習者Sでは、母語で行われた母親との対話の引用に日本語の待遇表現の巧みな使い分けで元発話者を示すという語用論的方略の使用や、推定・推測のモダリティ的表現の「と思う」の代わりに終助詞と聞き手への待遇表現を合わせた中間言語形式「かなです」の創出が見られた。言語能力レベルの低い教室内学習者では文体選択にリスクを感じている（Kamada）とされたが、本データでは最も言語知識が少ないと思われる学習者Sでむしろ文体の違いを積極的に利用する方略が観察された。また終助詞や実際の会話の場に合わせた待遇表現は教室内学習だけでは不十分になりがちであるが、本データではそれらを組み合わせて中間言語形式が創造された。このような統語知識の不足を補う方略の使用は、自然習得の可能性の一つを示していると言えよう。また、引用動詞の位置は、

「思う」を除いて先行型から習得が始まり、「って」の習得と共に後続型が優勢となる傾向が見られた。タガログ語の引用表現は「動詞＋引用句」で先行型である。言語知識の少ない学習者では母語の語順からの転移の可能性が推測されるが、日本語でも引用動詞が先行する場合があります、さらに研究が必要であろう。

9. 日本語教育への示唆と今後の課題

自然習得の学習者5名による引用表現の習得実態の記述を試みた。本データで見える限りにおいては、話し言葉では「って」の習得によって適切で幅広い引用が可能になっていることから、「って」の意識的な学習を進めるような教授の工夫が必要であろう。また、「と(言う)」は自然習得されにくいいため、書き言葉での適切な使用法も含め日本語教育での補いが必要である。今後の課題として、学習者言語における引用表現の直接引用と間接引用の使用実態の解明を含め、他の母語の学習者を対象にしたより幅広い自然習得者の実態研究を行い、教室内学習と教室外学習が相互的に補完しあえるシラバスの構築が望まれる。

注

- (1) 1998年の外国人登録者数は1,512,116人(特別永住者533,396人を含む)である(平成12年法務省告示)。一方、1999年11月現在日本語教育機関・施設で第二言語として日本語を学ぶ学習者は93,331人にすぎない(文化庁調べ)。
- (2) 本研究は平成12,13年度文部省科学研究補助金研究[萌芽的研究]「第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界」(研究代表者・長友和彦)の一環として行った。
- (3) 山崎では引用と伝聞を区別しているが、本稿では発話・思考等の進行中の会話への取り込みを表示する形式すべてを研究対象とするため、両者を区別せずにく引用と呼ぶ。
- (4) 社会福祉法人「日本国際社会事業団」ソーシャルワーカー沼崎邦子氏(1999年当時)が収集されたもので、氏の了解のもとに使用させていただいた。
- (5) 助詞等の文法的誤用が多いが、面接者の応答や前後の文脈から意味を推定した。
- (6) 学習者Sで「って」が1例表出されているが、会話で生じた口の滑りと考えられる。

参考文献

- (1) 岩淵悦太郎・村石昭三(1968)「言葉の習得」『ことばの誕生』日本放送協会出版 405-418
- (2) 大久保愛(1967)『幼児言語の発達』東京堂出版 81-109

- (3) 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』 ひつじ書房 165-172
- (4) 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性について」 『日本語学』 7, 14-29
- (5) 長友和彦 (2000) 「教室内日本語学習の可能性と限界：日本語の自然習得研究の示唆するもの」 『追求卓越的日本研究国際会議論文』 19-28
- (6) 仁田義雄 (2000) 『日本語の文法3・モダリティ』 岩波書店 158-159
- (7) 藤田保幸 (1988) 「『引用』論の視界」 『日本語学』 7, 30-45
- (8) 堀口純子 (1995) 「会話における引用の『ッテ』による終結について」 『日本語教育』 85, 12-24
- (9) 山崎誠 (1996) 「引用・伝聞の『て』の用法」 国立国語研究所研究報告集 17, 1-22
- (10) Clancy, P (1985) Acquisition of Japanese. In: Slobin, D.I. (Ed.), *The cross-linguistic study of acquisition: The Data*. Vol. 1: 373-524. Lawrence Erlbaum Associates. 436-439
- (11) Kamada, O (1990) Reporting Messages in Japanese as a second language *On Japanese and how to teach it: In honor of Seiichi Makino*. In: Kamada & Jacobsen (Ed.), 224-245

(お茶の水女子大学大学院)

The acquisition of quotation expressions by native Tagalog speakers in natural settings

SUGIURA Masomiko

This paper aims to clarify how Tagalog native speakers have learned the quotation forms with quotation markers like “*to / te*” in natural settings.

Five female Tagalog native speakers living in Japan for four to eleven years were interviewed by a social worker. Their Japanese proficiencies and numbers of quotation expressions appeared in the interviews were compared and analyzed. Positions of quotation verbs and related phrases were also examined.

It was found that the inexperienced learners have acquired mainly 3 patterns of quotations in the beginning : (1) “*datte*” “*n’datte*” for quoting speech of other persons; (2) “*watashi + iu + ϕ* ” for quoting their own speech ; (3) some final particles and “*to omou*” for quotation of their own thoughts . With the advance of quoting proficiency, use of “*te*” seemed to increase in these 3 forms of quotations.

The marker “*to omou*” seems to have been acquired as a formulaic expression for quoting learners own thoughts. The low proficient learner uses some strategies to compensate the lack of knowledge about quotation forms: use of appropriate styles; creative use of her own quotation form.

With the increased knowledge about the quotation expression, the quotation verbs tended to come after the quoted phrases.

(Graduate School, Ochanomizu University)